The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	風疹の大流行に思う : その災害と予防
Author(s)	奥野, 良臣
Citation	makoto. 1977, 18, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

風疹の大流行に思う

―その災害と予防―

大阪大学教授　奥野良臣

「風疹」別名「三日ハシカ」は麻疹の場合よりもやゝ細かい発疹と、多少の発熱もあるが、三日もすれば治ってしまうので、軽い病気と考えられていた。

私共は患者から風疹ウイルスを分離し、それを弱毒化してワクチンの開発をしたので、風疹に関しては或程度の知識を持っているつもりであった。しかし昨年全国的に襲った未曾有の大流行を経験してみると、今までの認識を大巾に改めなければならない点がいくつかあることに気がついた。

その第一は、風疹は必ずしも軽い病気ではないことである。昨年のように多数の人が罹ると、中には意識不明になったり尿失禁など脳炎または脳症を起してくる者がある。しかも大人に重症例が多かった。このような患者の検査依頼とか問合わせを受けて成書をしらべると、脳炎は稀に見られ、予後は一般に良好であると記されているので安心したが、この事は高橋君と私の共編「麻疹・風疹」の中に九州大学永山、植田両博士執筆の項に明記されている。質問を受けた当初知らなかった不明を恥じている次第である。

第二に、更に驚いたのは妊婦に限って異常な症状が現れることである。風疹の感染に対する不安症、昂じて風疹ノイローゼとも云うべき症状である。風疹の既応症が定かでなく、血清学的検査を行っても決め手が得られない時、しかも昨年のように大きな流行のある状況下では、神経質な妊婦がしばしば罹るのである。妊婦が風疹ウイルスに感染すると十中八九まで発症するので、症状の有無だけで大抵判断がつくのであるが、稀に不顕性感染に終ることもあり、その場合胎児に異常が起らないとは断言できない。妊娠以前に風疹の抗体検査をしておればよいが、妊娠後に初めてしらべるだけでは、たとえ何回しらべてもいつ感染したかは解りにくい。そこに風疹ノイローゼ発生の原因がある。諸種の状況から判断して感染の可能性は殆んど無く従って大丈夫だから産む方がよいでしょうと説明すると、一応納得するが、本人は千、万分の一の可能性を恐れて日夜悩み抜き何度も同じ質問を繰返して来て、応対する方も参ってしまうことしばしばであった。揚句の末無用な妊娠中絶を行った例も少くない。このような不幸を無くすために、女性は結婚以前または妊娠前に必ず抗体検査をしておくかワクチンを接種しておく必要がある。

では風疹の予防はどうか。今風疹はワクチンを使用することによって、ほゞ完全に予防できるようになった。わが国では今年から誰でも自由にこのワクチンを受けられるようになったので、広く徹底的に使用すれば、流行を喰止めることも至極簡単な筈である。このワクチンは副作用も殆んど無く、一本注射しておくだけで長期間の免疫が得られる。しかも厳に避けるべきとされている妊婦や同一家族の子供に対し、たとえ誤ってワクチン接種をしても自然感染の場合とちがって、危険性が少いことが次第に明らかになってきた。このようにワクチンと云う強力な武器によって妊婦の不安は一掃できるであろう。

ところが実情はどうであろうか。阪大微研の風疹ワクチンがわが国で初めて市販されてから約三ケ月になり、待ち焦がれていた一般の希望者は多いのであるが、いろいろの隘路があってまだ極めて少量しか使われていない。ワクチン希望の婦人が、かゝりつけの医師→保健所→大学病院と云った工合に聞き廻っても、接種して貰えないため遂に私共の研究室まで問合わせてくるケースがしばしばある。どこかで歯車が故障しているのである。

昨年の法改正以来、ワクチン推進上却って不都合が生じたばかりでなく、更に予防接種後の事故に対して医師の責任に帰するとしたような判決が出るに及んでは、医師側としても容易に実施できにくゝなったこと等々の事情がある。ワクチン全般についてそうであるが、風疹についても例外でなく、使用すれば大きな利益のあることが明白でありながら、余り使用されないとなると宝の持ちぐされに終ってしまう。

要するに流行を目前にしてワクチンを積極的に使わなければならない時に、右に述べたような余計な人為的制御が介在し、その結果流行を繰返すようでは事態は正に人災以外何物でもないと云うべきであろう。

更に嘆かわしいのは、すでに開発研究が完成し、外国からもその入手を熱望されているムンプスワクチンや水痘ワクチンはわが国ではいつ実用化されるか全くわからない現状である。私は右のワクチンの早期実用化を年来唱えつゞけている間に、アメリカでは風疹ワクチンはすでに六千万人以上に実施し、患者の激減を見ている。

わが国は学問的に先進国でありながら、政策上後進国に甘んじなければならないことが我慢ならないのである。

（一九七七・三・七）